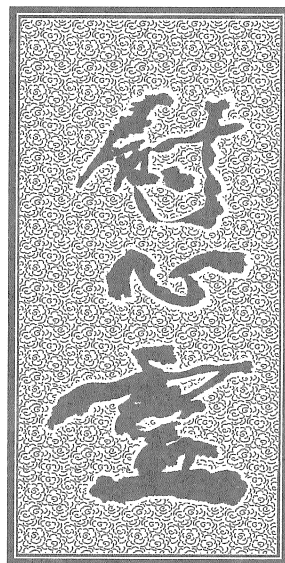


ペリリュー島の大山山頂。残る50数人がたてこもり、昭和19年11月24日「サクラ・サクラ」の最後の電報を打って玉砕した記念碑。

「サクラ サクラ」  
—ペリリュー島  
守備隊長最後の電文—



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 18 号

財団法人 大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会

〒105-0014 港区芝2-5-19  
TAビル4階

電話 03 (5730) 0421  
FAX 03 (5730) 0422

http://homepage2.nifty.com/ireikyuu

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能  
発行人 柚木文夫  
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

「サクラサクラ」—ペリリュー島 守備隊長最後の電文—	1
平成22年度千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式	7
硫黄島「日米合同慰霊式」に参加して	9
政府派遣硫黄島遺骨収集事業に参加して	10
図書紹介・フイリピン少年が見たカミカゼ	11
幼い心に刻まれた優しい日本人たち	11
ガダルカナルからの便り	13
ビスマーク諸島からの便り	13
事務局からの報告等	14

「発信地 ペリリュー  
発信者 歩二長  
発信時刻 11月22日07時40分  
受信者 高級副官宛

歩二電第一七七號

通信断絶ノ顧慮大トナレルヲ以テ最後  
ノ電報ハ左ノ如ク致シ度承知相成度

左記

一、軍旗ヲ完全ニ處置シ奉レリ  
二、機秘密書類ハ異状ナク處理セリ  
右ノ場合「サクラ」ヲ連送スルニ付報  
告相成度

(終)

右の電文は、昭和19年11月22日に、  
ペリリュー島地区守備隊長中川州男大  
佐(水戸・歩兵第二聯隊長・戦死後中  
将・陸士30期)が、パラオ本島の第十  
四師団(師団長井上貞衛中将・陸士20  
期)高級副官橋本津軽少佐宛に送った  
至急電(原文のまま)である。

ペリリュー島守備隊は、昭和19年9  
月15日の米軍上陸以来、死闘を続ける  
こと二カ月余、熾烈な砲爆撃に耐え、  
食糧、弾薬の枯渇を凌ぎつつ、決死の  
斬込みを続け、敵に甚大なる損傷と脅  
威を与えた。その間500通以上の詳  
細な戦闘報告・戦訓等の暗号電をバラ  
オ集団司令部宛に送っており、更に、  
敵前逆上陸に成功し、その後の戦闘に  
勇戦敢闘した歩兵第十五聯隊(高崎)  
第二大隊(長・飯田義榮少佐・陸士46  
期)の戦闘詳報・戦訓等を奈良四郎少  
尉らによる決死の海中游泳60キロの難  
行の末、パラオ集団司令部他に届ける  
等、冷静にして正確な観察による多大  
な情報をもたらし、その後の戦闘指導  
に大きく貢献した。

たので、パラオ集団司令部宛に玉砕の  
際の電文を「サクラ サクラ」と連送  
することの了承を求めたものである。  
その後11月24日、戦況ますます緊迫  
化し、10時30分、中川大佐は、パラオ  
集団参謀長多田督知大佐(陸士36期)  
宛に「敵ハ二十二日以来、我が大山主  
陣地中樞ニ浸入、昨二十三、各陣地  
ニ於テ激戦シツツアリ、本二十四日以  
降、特ニ状況カラ見テ陣地保持ハ困難  
ニ至ル。地区隊現有兵力、健在者約五  
十名、重軽傷者七十名、計百二十名、  
兵器ハ小銃ノミ、同弾薬約二十発、手  
榴弾、糧秣オオムネ二十日以降皆無、  
地区隊ハ本二十四日以降、統一セル戦  
闘ヲウチキリ、残ル健在者約五十名ヲ  
以テ、遊撃戦闘ニ移行、砲クマデ持久  
ニ徹シ、米奴撃滅ニ邁進セシム。重軽  
傷者中、戦闘行動不能ナル者ハ自決セ  
シム。重傷者中約四十名ハ、目下戦闘  
中ニシテ依然主陣地ノ一部ヲ死守セシ

ム。將兵一同、聖壽ノ万才ヲ三唱、皇運ノ弥栄ヲ祈願シタテマツリ、集団ノ益々ノ發展ヲ祈ル」との至急電を打電し、16時、大山戦闘指揮所の洞窟で、軍旗を奉焼し、機秘密書類を焼却。続いてパラオ集団長(第十四師団長)宛最後の電文を打電した。

「サクラ サクラ」

パラオ本島通信部に、その痛恨の思いを込めたペリリユー島守備隊玉碎を伝える電文が届いた時、その電文を見た者、等しく泣かずにはおられなかつたという。

この最後の電文を送った後、守備隊長中川大佐と、第14師団から派遣された、築城と戦闘指導に当たっていた師団司令部付幕僚村井權治郎少將及び第十五聯隊第二大隊長飯田少佐の3名は、古式に則り従容として割腹自決し、重傷者たちも後を追って自決した。

後に残された根本甲子郎大尉以下傷だらけの將兵56名は、最後の決死隊を組織し、大山の司令部洞窟陣地を出て遊撃戦に移行した。同11月24日18時、パラオ本島へ打電した次の電文を最後に通信は途絶えた。

「十八時ヨリ遊撃戦ニ移行ス

根本大尉以下五六名一七組、二十四日一七〇〇、編成完了。主トシテ敵幹部及び兵員ヲ随所ニ奇襲シ、以テ地区

隊長ノ遺志ヲ繼承シ持久ニ徹シ、集団司令官閣下ノ御意圖ニ副ワン。

遊撃隊員ハ一同、士氣旺盛、闘魂ヲ燃シ、神出鬼没、敵ノ心胆ヲ寒カラシム。夜鬼トナリ、之ガ粉殺ヲ期セントス。通信断絶ノ為本日以テ連絡期シ難キモ、御諒解ヲ乞フ。

最後ハ何等カノ方法ヲ以テ報告致度ニ米軍公刊戦史は、この時の状況を次のように述べている。

「米歩兵第八十一師団(第三二二連隊欠)は十一月二十五日、包圍圈を圧縮し、同二十七日七時、大山全地区の掃蕩戦攻撃を開始、同日十一時、第二三連隊長ワトソン大佐は第八十一師団長ミューラー少將に作戦終了を報告した。なお、米海兵隊公刊戦史によれば、遊撃隊根本甲子郎大尉以下五十六名十七組は、米軍の包圍圈を突破できず、二十四日の夜から二十七日七時頃までの間に、米軍と激しく交戦、全員玉碎した」と。

この小さな島(南北約9キロ、東西約3キロの珊瑚礁の島で、中央高地は高さ約80メートル)で練り広げられた戦闘は、グアム島、サイパン島にまさる激しいもので、太平洋戦史上に特筆すべき戦歴を残している。同じパラオ諸島の近くの島アングウル島戦と並んで、その壮絶さは世界戦史上初めての

例であるとも言われている。その恐怖は米軍戦史にも明らかであり、米軍は「これほど高価な代償を払ってまで占領しなければならなかつたのか」と述懐しているくらいである。

しかも「天山死守」を命じられた第二聯隊第二大隊の一部(山口永少尉以下22名)と、海軍の生存者12名計34名が最後に降伏したのは、終戦の時から約2年経った昭和22年4月であった。彼らは守備隊の遺志を引き継ぎ、持久に徹し、ゲリラとなって米軍を悩まし続けたのである。「祖国の防壁となれ」という合言葉の下に、ペリリユー島、アングウル島を守った兵士たちは、故国の家族に敵を近付けるなどという純真一途な気持ちで、一命を擲ったのであった。

◇ ◇ ◇

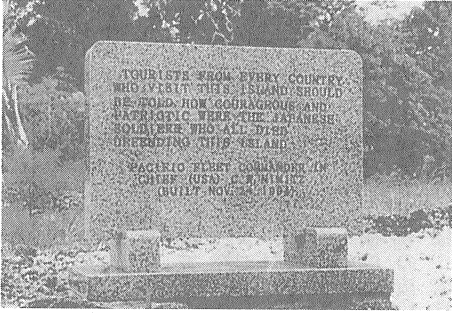
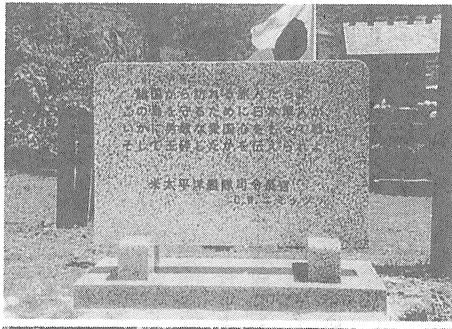
高貴な日本精神の発露と称えられる故名越二荒之助先生の遺書とも言われる「史実が語る日本の魂」と題する著書の中に、「世界で最も短い詩」として日本武尊が、その妃弟橘媛を恋する絶唱「あづまはや」と、この守備隊最後の電文「サクラ・サクラ」が挙げられているが、名越先生は次のように紹介しておられる。

「日本には哲学がない、とよくいわれるが、膨大な観念用語で固めた「哲学」は不要なのである。それよりも十

七文字の俳句や、三十一文字の和歌のほうが短くて、千万言の内容を含めることができる。その中でもさらに短い詩がある。それを紹介してみたい。

一つは、大東亜戦争中の昭和十九年(一九四四)のことである。そのころ日本の委任統治領であったパラオ諸島の南方に、ペリリユー島があった。日本はそこに東洋一の規模を持つ飛行場を造り、中川州男大佐以下約一万人が守備に当たっていた。守備隊は狭い島に洞窟を掘りめぐらし、徹底抗戦の構えで待機していた。米軍は猛烈な艦砲射撃を連日にわたって繰り返して、九月十五日、四万五千人の大軍をもって波状的に上陸してきた。日本軍は一時は米軍を撃退する戦果を挙げたが、弾薬も食糧も乏しい中、悪戦苦闘、それでも七十三日間持ちこたえた。ついに生き残りが五十人になった十一月二十四日、通信手段断絶の最後に「サクラ・サクラ」の六文字をパラオ集団司令部あてに打電した。全員桜のごとく散ってゆく決意を固めた電報であった。

この壮絶なる戦闘に対し、昭和天皇から十一回にわたって嘉尚の電文が寄せられ、米軍はペリリユー島を「天皇の島」と名づけた。太平洋艦隊司令官であったニミッツ大將は、「太平洋戦争中最も大きな損害率(四〇パーセ



ペリリュー神社に建立されたニミッツの詩碑。  
碑の両面に和文、英文で刻まれている

観者達に深い感銘を与えたのであるが、パラオ共和国のトミー・E・レメンゲサウ正大統領は次のような同展に対する挨拶文を寄せておられる。

「この度は、靖國神社及びNPO法人日本パラオ協会他関係の皆様方の御尽力により、「パラオの歴史と英霊展」が靖國神社の境内にて開催される運びとなりましたことは、パラオ共和国として誠に喜ばしいことであり、厚く御礼申し上げます。  
一九二〇年、日本はミクロネシア地域の統治を国際連盟により委任され、その行政本部をパラオに置きました。それから二十五年間、日本はパラオに産業技術と教育制度をもたらし、パラオの文化発展に寄与されました。  
一方で、第二次世界大戦以前よりパラオには日本軍が常駐し、このために一九四四年〜一九四五年にパラオも戦場になりました。今もパラオには、多くの日本兵が静かに眠っています。  
第二次世界大戦後、パラオは一九九四年十月の独立までの間、アメリカ合衆国による国際連合の信託統治下に置かれました。それまでの日本の産業は失われましたが、今も日本の言葉や文化がパラオ文化の一部として残っています。

- このように、光と影の両面があったパラオと日本の関係ですが、両国の長く深い関係は非常に重要なことと考え、この友好関係が今後も長く続くことを願っております。
- 四 日本は、この展示会を通じて、日本の多くの人達がパラオのことをお知りになり、是非パラオにお越し下さいますよう、希望いたします。」
- ② パラオで今も愛唱される歌「昭和十九年九月十五日に米軍がペリリュー島に上陸して以来、二カ月余にわたる日本将兵の死闘に思いを馳せるため、パラオでは日本の国花「桜」に慰霊鎮魂の誠を託して「ペ島の桜を讃える歌」を作った。この曲は一番から八番までの構成で、今でも島民に愛唱されている代表作でもある。また、この曲のほかに日本でもよく知られている歌に「酋長の娘」「パラオ恋しや」などがあり、日本とパラオ両国民の心の交流を示している。
- 「ペ島の桜を讃える歌」  
作詞 オキヤマ・トヨミ  
作曲 ジョージ・シゲオ
- 一 激しく弾雨が 降り注ぎ  
オレンジ浜を 血で染めた  
強兵たちは 皆散って  
ペ島は総て 墓となる  
小さな異国の 誓いつつ  
死んでも守ると 迎え撃ち  
山なす敵を 食糧もない  
弾射ち尽くし 春いちど

ント)であった」と著書に記し、「この島を訪れるもろろの旅人たちよ…」で始まる詩を作った。  
戦闘が終わると、パラオの人々は泣く泣く日本兵士の遺体を埋葬した。彼らはその後も「サクラ・サクラ」の最後の電文を忘れられなかった。現地の女酋長の沖山豊美さん(日本名。父は日本人)は、「ペ島の桜を讃える歌」と題する歌詞を作り、小学校長のウェンティさんが作曲した。八番まで続くこの歌は、その後もパラオで愛唱されている。そればかりではない。パラオにも桜を植えたいたとして、日本から桜の苗木を持っていったが、熱帯のため育たなかった。今は桜に似た花を「南た英霊たち」(パラオの歴史と英霊展)と称して「国花」のように

している。  
そしてもう一つ。ペリリュー島には「サクラ」と名づけられた野球チームがあり、いつも優勝している。彼らは「ヤマトグマシイで戦うから勝つ」と言う。中川隊長が打った最後の電文、「サクラ・サクラ」という六文字の詩は、彼らに万感の思いを伝え続けているのだ」と。  
編注  
① NPO法人日本パラオ協会では、平成19年3月24日から6月17日まで、靖國神社遊就館1階特別企画展示室において、「戦跡パラオ展―パラオに散った英霊たち―」(パラオの歴史と英霊展)という特別展を開催し、多くの参

観者達に深い感銘を与えたのであるが、パラオ共和国のトミー・E・レメンゲサウ正大統領は次のような同展に対する挨拶文を寄せておられる。

「この度は、靖國神社及びNPO法人日本パラオ協会他関係の皆様方の御尽力により、「パラオの歴史と英霊展」が靖國神社の境内にて開催される運びとなりましたことは、パラオ共和国として誠に喜ばしいことであり、厚く御礼申し上げます。  
一九二〇年、日本はミクロネシア地域の統治を国際連盟により委任され、その行政本部をパラオに置きました。それから二十五年間、日本はパラオに産業技術と教育制度をもたらし、パラオの文化発展に寄与されました。  
一方で、第二次世界大戦以前よりパラオには日本軍が常駐し、このために一九四四年〜一九四五年にパラオも戦場になりました。今もパラオには、多くの日本兵が静かに眠っています。  
第二次世界大戦後、パラオは一九九四年十月の独立までの間、アメリカ合衆国による国際連合の信託統治下に置かれました。それまでの日本の産業は失われましたが、今も日本の言葉や文化がパラオ文化の一部として残っています。

見事に咲いて 明日は散る

べ島の桜は 散り散りに

玉砕れども武勲は 永久に

戦友遺族の 皆さまに

永遠までも かわりなく

必ず我等は 待ち望む

桜とともに 皆さまを

③ 米太平洋艦隊司令長官ニミッツ元

帥は、自著『太平洋海戦史』の中で、ペリリュー戦について、「ペリリュー

の複雑極まる防備に打ち勝つには、米

国の歴史における他のどんな上陸作戦

にも見られなかった最高の戦闘損害比

率(約40%)を甘受しなければならな

かった。既に制海権、制空権を持って

いた米軍が、死傷者合わせて一万人を

超える犠牲者を出してこの島を占領し

たことは、今もって疑問である」と書

いており、また、現在ペリリュー神社

境内にある石碑には、「諸国から訪れ

る旅人たちが、この島を守るために日

本軍人が、いかに勇敢な愛国心を持っ

いただいた。)

玉砕の島から堂々復員、天皇陛下

に拝謁を賜った栄光の聯隊

〈遺稿〉

歩兵第五十九聯隊パラオ

作戦外史抄

聯隊本部付

陸軍大尉 井上 英雄

「編注—本稿は『栄光の五九聯隊』な

る聯隊史よりの抜粋であるが、著者の

井上英雄氏は、広島陸軍幼年学校から

陸軍士官学校へ進み、昭和16年7月卒

業(55期)後、見習士官として満洲チ

チハル駐屯の第14師団宇都宮歩兵第五

十九聯隊に配属、同年10月陸軍少尉、

聯隊旗手、昭和18年3月陸軍中尉、昭

和19年3月同聯隊の南方転出に伴い、

チチハル出発、本部付(作戦主任)と

して同年4月パラオ諸島アングウル島

へ進駐、同年8月パラオ本島へ転進、

同年12月陸軍大尉、翌20年8月終戦、

士気を保持し、遂に終戦を迎えても軍

の統制を維持して自主管理を続け、翌

21年2月、米軍のLSTに乗船して同

月17日夕刻、無事横須賀・馬堀海岸に

上陸したが、その後も階級章を付けた

まま兵舎において規律ある軍隊生活を

続け、同月21日に、神奈川県下初御巡

幸の昭和天皇に拝謁の栄を賜った唯一

の聯隊である。

井上英雄氏は復員後、昭和29年4月

株式会社潤工社を創立、代表取締役社

長に就任し、「企業は社会の公器」と

の信念の下、世間の常識に超然とし、

凜とした姿勢を貫かれ、世の中の価値

観が如何に変化しようとも絶対に変え

てはいけない、天地自然の道理に基づ

いた哲学を経営の現場で実行された経

営者であった。そして、昭和56年9月

16日に脾臓癌のため59歳の若さで逝去

されるまで、一貫してその経営哲学を

実践し、社内はもちろん、業界の厚い

信頼を保持された。」

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

◇ ◇ ◇

である。

前記七月二十六、七日の空襲前、在  
グアム三十一軍参謀副長より集団司令  
部（第十四師団司令部）宛に電信があ  
り「アンガウル島に一ヶ聯隊を置くよ  
り、むしろその主力をパラオ本島南地  
区に移動せしめ、アイライ飛行場の守  
備に任ずべし」と指示をして来たので  
ある。

集団司令部としては、直ちにアンガ  
ウル守備隊長である歩兵第五十九聯隊  
長江口大佐に対し、一個大隊を残置し  
主力はパラオ本島南地区に移動するよ  
う、取りあえず打電した。

これに対し、江口八郎大佐は反対の  
意見を具申した。

理由は二つある。

その一つは、聯隊が軍旗を奉じてア  
ンガウル島に歩を進めて以来、アンガ  
ウル島そのものを戦場と心得、配備計  
画も終わり、全員一致して陣地構築に  
専念して来たが、その心の中には、軍  
旗を中心に聯隊全員死なば諸共にとの  
覚悟があらばこそであり、今更一個大  
隊のみを残置するのは誠に忍び得ない  
ものがあると言うことである。

またその上には、アンガウル島の守  
備計画は一個聯隊を基に立ててあり、  
既に陣地構築の大半を終了している。  
しかるにそれを一個大隊に変更した

場合は、ちようど大人の着物を子供に  
着せたようなもので、敵の来襲近きを  
予測する今日、とても修正が間に合わ  
ないのみならず、戦略的に見て、一個  
大隊を残すくらいなら、むしろ一兵を  
も置く必要がないのではないかという  
疑問である。

これに対し集団司令部では、海軍の  
汽艇にて作戦主任参謀中川大佐をアン  
ガウル島に派遣し、江口大佐の説得に  
かかったのである。

江口大佐も命令であるうえ、中川参  
謀の熱意ある説得には如何ともしがた  
く、第一大隊をアンガウル守備隊とし、  
主力は直ちにパラオ本島に移動すべく  
命令を下達したのである。

かくて江口大佐は、アンガウル小学  
校校庭に整列する第一大隊長後藤丑雄  
少佐以下大隊全員に声涙共に下る訣別  
の辞を述べた後、七月末より八月中旬  
にかけて、パラオ本島への移動を完了  
したのである。（以下略）

### 三 ペリリュー並びにアンガウル

#### 両島の戦闘開始前後の状況

八月下旬より連日にわたり、B 24の  
来襲あり、敵の作戦近きを思わせたが、  
九月六日、グラマン戦闘機を主体とす  
る攻撃が始まり、機動部隊の接近が察  
知され、旬日をわずして上陸が開始さ  
れるものと判断した。

九月十五日、敵はペリリュー島に上  
陸を開始すると共に、パラオ本島マル  
キヨク地区へ艦砲射撃を実施、南地区  
隊としては、敵の上陸を予測し、蜂巣  
少尉を将校斥候としてマルキヨク方面  
の道路並びに地形偵察を実施せしめ、  
何時にても同方面に出撃し得るよう準  
備を進めたのである。

九月十七日、敵は更にアンガウル島  
に上陸を開始したが、本島に対しても  
攻撃の手を伸ばすことあらんと判断し、  
同二十一日、南地区配備の件につき、  
現地視察と連絡を兼ねて、アリミズ水  
道地区に広瀬大尉を訪ね、次いで南地  
区に最も近く所在し、作戦上、連撃を  
要する歩兵第十五聯隊飯田大隊を訪れ、  
大隊長と南地区における作戦について、  
意志の疎通を図った。

当日は同大隊本部に宿泊したが、飯  
田少佐と、折から来訪した村堀中尉  
（ペリリュー島逆上陸先遣中隊長）と  
三人で夕食を共にしている打ち合  
わせをしたが、翌日の夜よりの同大隊  
の逆上陸作戦については、何等知ると  
ころはなかったのである。

### 四 集団総力を挙げての逆上陸計画

十月初め、集団は総力を挙げてペリ  
リュー島へ逆上陸をする計画を定め、  
時期は十月に多発する暴風雨の夜とし  
て各部隊にその準備の命令を下達し、

十月八日、集団司令部において右作戦  
の細部について打ち合わせを行ったの  
である。これに基づき歩五九において  
は、十月十日夜晩部隊と逆上陸のため  
の乗船地などの件について打ち合わせ  
を行い、次いで部隊全員に対しては、  
乏しい食糧の中からなるべく栄養を補  
給するよう指示を与え、体力の方面か  
らも、この作戦の準備を進めていたの  
である。この逆上陸は、兵数も多く、  
しかも同時発進の関係もあるので、予  
定乗船地をマラカル埠頭（コロール島  
）と定め、海軍部隊進藤大尉の応援を得  
て、十月十八日頃同埠頭付近の地形偵  
察を行い、部隊の集結地などについて  
腹案を決定したのであった。

かくて歩五九としては、集団の逆上  
陸実施命令を待つのみ態勢となり、  
十月下旬には戦闘訓練と土気の高揚を  
目的として中隊検閲を実施し、決戦の  
日を今や遅しと待機していたのである。  
また、島嶼作戦の特殊性及び海空軍の  
支援絶無の状態における作戦のため、  
特殊編成の斬込隊戦闘要領を作成し、  
同訓練を連日にわたり実施したのであ  
る。しかし、残念ながらこの作戦は、  
遂に実施されなかった。（以下略）  
五 昭和十九年十二月以降におけ  
る集団の作戦方針の推移  
十一月二十四日ペリリュー守備隊が

玉砕した頃より、集団においては、従来の水際撃滅作戦より持久戦的思想に移行したもののようと思われる。特に二十年二月には、はっきりとその思想を打ち出し、パラオ本島の中核部に複郭陣地の構想を示したのである。この間ペリリュー、アンガウルを基地とする、敵海防艦による本島周辺の牽制に對しては、現地召集の沖繩県出身の漁師を中心に、「海のシラミ」と称する特攻隊を編成して、爆薬を抱えて游泳により敵艦に接近してこれを爆破する作戦を展開し、幾多の戦果を上げたのである。しかし、これも敵の警戒が厳重になるに従い、困難の度合いを増して来たので、歩兵砲による夜間攻撃を決定し、三月初めには、歩五九より小宮山中尉を長とする聯隊砲一門をウルクターブル島に送り、昼間は敵に遮蔽し、夜間には付近を航行する敵海防艦を砲撃させたのである。また、ペリリュー島の北に連なるガラゴン島へ歩十五の仁平少尉を長とする斬り込み隊を投入し、立派な戦果を上げたことは、全集団の士気を高揚し、特筆に値するものであった。

ペリリュー島を奪取以来、同島の飛行場を基地として連日の如くF4U戦闘機を主体とする攻撃があったが、当方も適時に対空砲火を交え、多少の戦

果を上げると共に、若干の損害を受けたが、戦局に大きな影響を与えるものはなかった。

## 七 終戦前後の状況

(前略) 八月十日過ぎ頃中川参謀より、一部朝鮮人部隊(軍夫)に不穩の動きあるとの情報を知らされ、地区隊としても厳に警戒するよう注意されたが、彼等は鋭敏に終戦への動きを感じ取っていたのではあるまいか。

八月十五日夜中川参謀より電話があり、聯隊長共々明朝九時までに司令部に出頭せよとの指示を受けたが、当時聯隊長は臀部腫瘍のため歩行困難な状況にあり、その旨申し述べたところ、重大問題の発表がある故、万難を排して出席されたしとのことで、已むを得ず聯隊長に当番兵のほか、担架を準備し、夜半に出发、約八時間を要して司令部に到着したのである。その間聯隊長は始終歩行を続け、遂に担架は利用することがなかった。司令部に到着直前、師団通信隊の將校から終戦の事実を囁かれたが、聯隊長には報告することなく、司令部会議に臨んだのである。この会議において、参謀長より終戦のことを聞かされ、次いで全員慟哭の中で、勅命ならば徒に輕率妄動を戒め、この上は一兵も損ずることなく故國の地を踏ませることを唯一の任務と心得

て、終戦の処理に当たるとの切ない指示を受けて散会したのである。

八月十七日頃、敵はアイライ飛行場に通信筒を投下したが、井上集團司令閣下と表記してあり、直ちに深堀大尉を伝令として司令部に持参させたのである。その内容は現地における終戦交渉に必ず同意の有無を質して来ているので、応諾の意を伝えるため、翌早朝聯隊本部の兵数名を伴い、アイライ飛行場に白布をもって十字を描いたのである。

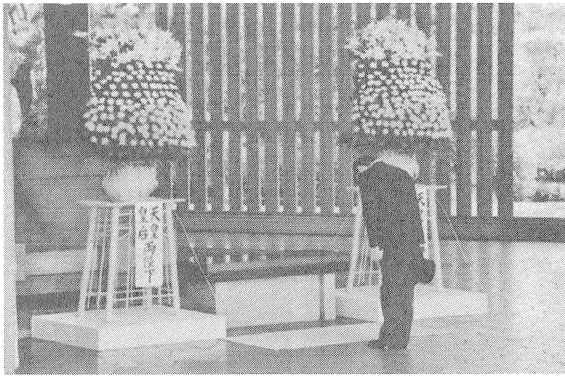
集團司令部と米軍との終戦交渉は、敵の艦上で行われたのであるが、この交渉に当たった井上司令官、多田参謀長の交渉内容、態度とも見事なものであり、集團は捕虜という卑屈な待遇を受けなかったのみならず、復員完了までは、パラオ本島には、連絡あるいは交渉の用務を持った者以外は、一兵たりとも米軍を上陸させなかったのである。これは、敗戦というショックにより、ややもすると自信を失い、弱気に陥りがちの全集團の將兵に對し、最後まで日本軍としての誇りを持たせる大きな原動力となったものである。しかし敗戦はあくまで敗戦である。武装解除に伴い、兵器はもとより將校の軍刀はすべて米軍に引き渡し、本島に蓄積された弾薬類は、日米両軍の協

同作業により、あるいは海中投棄を行い、あるいは一地に集積後爆破処理をってしまったのである。

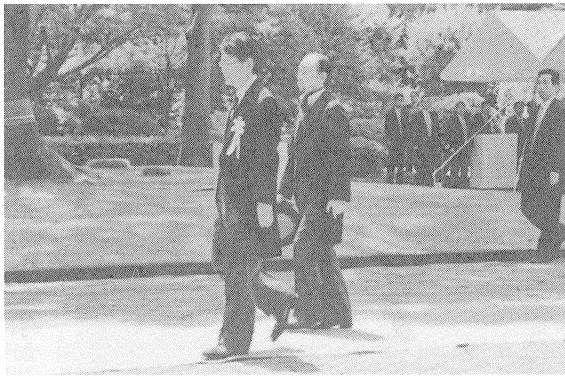
そうした中で、歩五九においては、八月下旬、エリキール川中流川畔の聯隊長宿舎前の台地で、全將兵の見守る中、シベリア出兵、滿洲事変、北支の戦闘と輝かしい伝統に映える軍旗を奉焼したのである。しかし、軍旗の一部を細かく切つて各自に分配し、今後の心の糧にと、涙の中で誓い合つたのである。

## 九 天皇陛下の行幸と歩兵五九聯隊の解散

昭和二十一年二月十七日朝、水平線上に富士山を見る。全員甲板に立ち、誠に感無量なるものがあつた。夕刻無事馬堀海岸に上陸、直ちに兵舎に入つたが、復員局の連中にしてみれば、全員階級章を付けたままであつたので、まず驚いたらしい。すぐにも階級章を取るように指示して来たが、復員手続が終つて、この兵舎を出るまでは部隊を解散したわけではなく、その日まであくまでも軍隊である、との信念でその指示を拒否したのである。いままでもPWの服を着けた復員部隊の多い中で、大変奇異に感じたものらしい。予てこのような状態も予測していたので、準備していた週番肩章とラッパを持ち出し、平時の軍隊生活のまま



拝礼をされる三笠宮寛仁親王殿下



御臨場になる三笠宮寛仁親王殿下

### 平成22年度 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

#### 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

起床、点呼、消灯などラップをもつて規制し、週番士官を置いて内務の責任を取らせたのである。しかも夜は軍歌演習を行い、営庭の中を隊伍堂々と行進して士気の高揚を図り、最後の日本陸軍への別れを告げたのである。

当初は、この歩五九将兵の態度に対して内地の状況も知らない生意気者と思っていた復員局の人々もその気持ちが見るに至り、上陸後三日目に解散の規定にも拘わらず、陛下の行幸まで是非残られたしとの依頼により、解散を延期して二十一日に天皇陛下をお迎え

平成22年度厚生労働省主催の拝礼式が、5月31日(月)三笠宮寛仁親王殿下の御臨席を仰ぎ、新緑滴る千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、厳粛に執り行われた。

掃き清められた墓前には、天皇皇后

することになったのである。後で聞くところによると、これが戦後初めての行幸であり、歩五九将兵の前に立たせられ、何くれとなく親しく御下問になったのである。また、陛下の御下問に対する江口聯隊長の烈々たる答申よりは見事と言うほか形容のしようのないも

両陛下御下賜の大花籠が供えられ、約560名の参列者がお待ちするなか、定刻12時30分、殿下が御臨場になられて拝礼式は開始された。

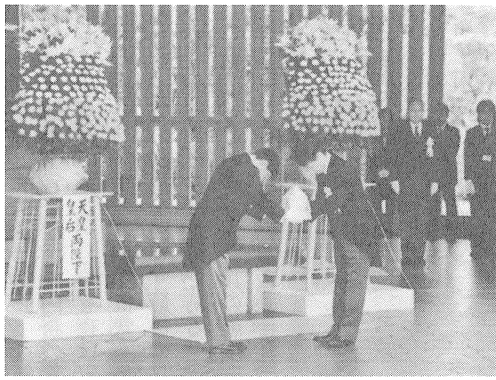
皇宮警察音楽隊の演奏に合わせ、参

列者全員が国歌「君が代」を斉唱し、次いで、長妻厚生労働大臣が式辞(後掲)を奉読した後、同省清水社会・援護局長から手渡された御遺骨を奉持して納骨の儀を執り行った。今回、納骨堂に納められた御遺骨は、硫黄島、フィリピン、マリアナ諸島、マーシャル諸島、パラオ諸島、ビスマーク・ソロモン諸島、モンゴルにおいて収集された3937柱で、これにより千鳥ヶ淵戦没者墓苑には合計35万8269柱の御遺骨が納められたことになる。

納骨の儀終了の後、参列者一同が起立する中、三笠宮寛仁親王殿下が墓前にお進みになって深々と御拝礼、戦没者の御冥福をお祈りになられた。参列者一同も殿下の御拝礼に合わせて拝礼

のであった。かくて、翌二十二日朝、解散式を行い、ここに歩兵第五十九聯隊の歴史は完全に幕を閉じたのである。

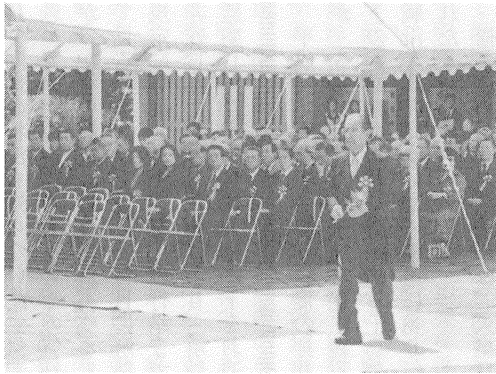
次いで、鳩山由紀夫内閣総理大臣が献花、拝礼され、続いて長妻昭厚生労働大臣、岡田克也外務大臣、環境大臣代理鈴木自然環境局長、防衛大臣代理折木統合幕僚長、関係国のインドネシア共和国、パラオ共和国、プア・ニューギニア、フィリピン共和国、ロシア連邦、アメリカ合衆国の各駐日大使、ソロモン諸島名誉領事、衆・参両議院各厚生労働委員長、各政党代表として、羽田孜(民主)、谷垣禎一(自民)、山口那津男(公明)、阿部知子(社民)、自見庄三郎(国民新)、渡辺秀央(新党改革)、浅尾慶一郎(みんなの党)、平沼赳夫(たちあがれ日本)、田中康夫(新党日本)の各議員、尾辻秀久日本遺族会副会長、遺族代表の献花が行われ、最後に、宮下創平千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会長が献花を行って、13時



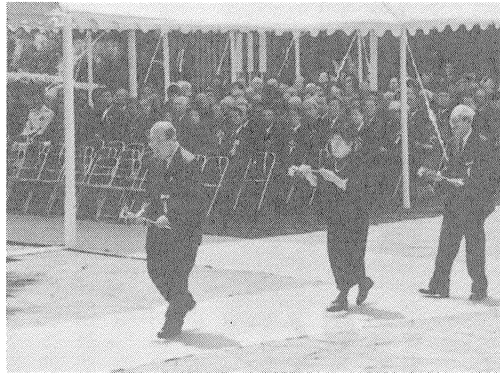
長妻厚生労働大臣による納骨の儀



献花に向かう鳩山内閣総理大臣



献花に向かう宮下率任委会会長



遺族代表による献花

20分、式典は滞りなく終了した。その後、一般参列者やこの日に合わせて来苑した遺族・慰霊団体等の参拝が相次いだ。

### 拝礼式式辞

厚生労働大臣 長妻 昭

本日ここに、寛仁親王殿下の御臨席の下、戦没者御遺族及び来賓各位の御参列を得て、千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式を挙行するに当たり、一言ごあいさつを申し上げます。

先の大戦におきましては、三百万人の方々が悪くなられ、海外では、二百四十万人もの同胞が、祖国の安寧を願いながら、苛烈な戦闘に倒れ、また、戦後、遠い異国の地でお亡くなりになりました。

これらの海外戦没者の御遺骨を祖国にお迎えするため、政府においては、昭和二十七年に南方地域へ戦没者遺骨収集団を派遣して以来、多くの関係者の皆様とともに全力を挙げて収集してまいりました。

本年、先の大戦の終結から六十五年という節目の年を迎えましたが、今なお、多くの戦没者の方々が海外に眠っておられます。厚生労働省としては、戦没者御遺族、戦友、ボランティア、民間団体の方々など数多くの皆様の一層の御協力もいただき、また、戦没者遺骨収集団を昨年度よ

り三地域多い十一地域に派遣するなどにより、なお約六十万柱にのぼるお迎えすべき御遺骨を一日でも早く祖国にお迎えできるように、今後とも力を尽くしてまいりたいと決意を新たにすることであります。

ここ千鳥ヶ淵戦没者墓苑に、本年は、硫黄島、フィリピン、マリアナ諸島、マーシャル諸島、パラオ諸島、ビスマーク・ソロモン諸島、モンゴルにおいて収集いたしました三千九百三十七柱を新たにお納めいたします。これにより千鳥ヶ淵戦没者墓苑に納められる御遺骨は三十五万八千二百六十九柱を数えることとなります。

この式典に当たり、改めて今日の我が国の平和と繁栄の礎となられた戦没者の方々に深く思いを致し、謹んで哀悼の誠を捧げますとともに、先の大戦から学びとった多くの教訓を次の世代に継承し、恒久の平和を確立すべく力を尽くしてまいります。ことをお誓いいたします。

最後になりますが、千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて眠られる戦没者の方々の安らかな眠りと、戦没者御遺族の皆様方の御平安を切に祈念いたします。式辞といたします。



# 硫黄島「日米合同慰霊式」に参加して

理事長 柚木 文夫

平成22年3月3日(水)、硫黄島にある「日米再会記念碑」前において、「日米合同慰霊式」が挙行され、当協議会を代表して出席いたしました。

式典では、日米代表がそれぞれ追悼の言葉を述べられました。日本側遺族代表として衆議院議員新藤義孝氏が述べられた追悼の言葉は、大変感動的でしたので、後ろに紹介させていただきます。米国代表は、駐日米大使ジョン・V・ルース氏でした。

引き続き日本側は、「天山慰霊碑」前において、硫黄島協会主催による慰霊追悼式を行った後、島内の慰霊巡拝を実施しました。

## 「追悼のこぼれ」

遺族代表

衆議院議員 新藤 義孝

私たち硫黄島戦没者の戦友及び遺族は、遠路米国からいらっしやった米国民硫黄島協会の皆様を心から歓迎いたします。本年も、この島で友人となった人々と再会できたことを嬉しく思います。かつて戦いを交えた者同士が集い、

合同で慰霊追悼を行うのは、世界でただ一カ所、ここ硫黄島であることを誇りに思い、深い感慨を覚えます。

65年前、この島の戦闘は激烈を極め、多くの戦死者を出し、硫黄島は歴史に名を残すことになりました。日本の兵士たちは、50度を超えるような地下壕に耐え、食べる物も飲む水もないまま必死に戦い抜きました。圧倒的な兵力差の中で、追い詰められた人々は、逃げず、へこたれず、最後まで自らの役割を果たしました。一体何のために、そして何故そこまで踏み止まることができたのか。この灼熱の地獄で闘った兵士たちは、まさに故郷に残した両親や愛する人たちのために何とか頑張ろう、その危険を出来る限り先延ばしするたために、自分たちはこの苦しさで耐えようということだったのだらうと思えます。

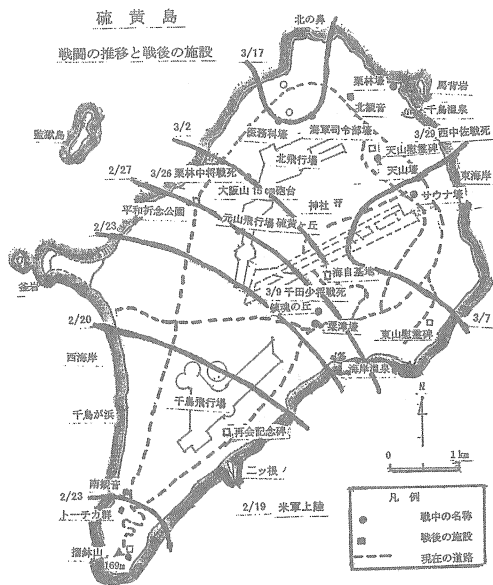
ここ硫黄島での壮絶な戦いは、クリント・イーストウッド監督の手により日米双方の観点から見た二つの映画となり、アカデミー賞にノミネートされるなど世界中に話題を呼びました。そして、二つの映画により明らかになった当時の日本人の気持ちとアメリカ人の気持ちは、「大切なものを守るため」という同じものだったのです。同じ気持ちを持つ兵士たちが何故戦わなくて

はならなかったのでしょうか。イーストウッド監督は「戦争は若者の未来を奪う悲惨なものだ。しかし、家族や大切なものを守るために犠牲となった人たちのことを、我々は尊敬し、絶対に忘れてはならない。そのことを世界中の人に知らせたい」と語ってくれました。私たち遺族は、祖国のため、家族のために戦った先人に心より哀悼の誠を捧げるとともに、この事実を風化させないよう、次の世代に伝えていかなくはなりません。この島の遺骨収集はまだ4割程度しか済んでおらず、時間の止まったこの島で、1万3千人を超える方々が眠り続けていることを皆様

に知っていただきたいと思えます。私

私たちは、全員の遺骨が故郷にお帰りたい。ただくまで活動を続けて参ります。そして、現在の平和と繁栄が多くの英霊たちの尊い犠牲の上に築かれたことを心に刻み、日米両国民が引き続き協力して世界の平和と安定のために、一層努力してゆくことを改めて誓うものがあります。

本日の合同慰霊式の開催に当たり、多大のご支援をいただきました硫黄島基地を始め、自衛隊の皆様、外務省、厚生労働省、政府関係者並びに在日米海兵隊、在日米海軍の協力を厚く感謝を申し上げ、遺族を代表しての追悼のこぼれといたします。



# 政府派遣硫黄島遺骨収集事業に参加して

靖國神社主典 野崎 竜太

平成22年2月1日(月)より同月19日に至る19日間、厚生労働省社会・援護局による「平成二十一年度第四次硫黄島戦没者遺骨収集・調査」が実施され、私はJYMA(日本青年遺骨収集団)の団員として、遺骨収集に参加することになった。

硫黄島は東京の南方約一二五〇kmに位置し、昭和二十年二月十九日に米軍が上陸を開始した。対する日本は前年六月に着任した栗林忠道中将の下に総延長十八kmに及ぶ地下坑道を含む陣地と太平洋戦線でもまだかつてない火力戦闘組織を作り上げて抗戦し、米軍が五日間で占領する予定であったところを一カ月余も持ちこたえて敢闘した。米軍にとって死傷者数が日本を上回った唯一の戦場がこの硫黄島である。

※ ※ ※  
出発する早朝には雪が積もっていた。厳しい寒さの中、入間基地を出発して約二時間半後には東京都とは思えない暖かな硫黄島の飛行場に降り立った。今回の任務の第一は、「日本戦没将兵

慰霊碑(天山慰霊碑)から以北方面にかけての地域内(ロランタワー跡東南)及び第三次派遣団より引き継いだ地点における調査及び遺骨収集」である。壕中の土を慎重に選り分けて御遺骨を採す。人間の骨に関しては、事前に机上で学んで行ったものの、果たして判別がつくものか不安であった。不慣れた間は御遺族の方にお聞きして、確認をしていたのだが、最初に探し当てた御遺骨は大変鮮烈で、赤みを帯びた白い部分が太陽の光を受けて眩い程輝いていた。壕の中に堆積する土を外に出しながら深部へと進んでゆく。

往時、壕中の作業は、地熱が高いために長くても八分から十分、短いところでは三分の作業が限度であったと言われている。今回の遺骨収集では、知識として有していた壕中の過酷な事実を、身をもって経験することができた。ただ「暑い」とのみ書かれていることであつても、それがどのようなものであるかは、経験してみなければ分からないものである。同じ壕の中にいるとはいへ、当時と比べれば、自らの置かれていた状況は格段に恵まれているが、それでも耐え難い暑さであることに変わりはない。こうした環境の中、御遺族の方々は御高齢にも関わらず、実に精力的に作業を行われている。ある方

は「ここから出る御遺骨は誰のものといふことはなく、すべて自分の身内のものだと思つて作業している」と語られていたが、まさにそういうことなのであろう。

期間中は十三柱の御遺骨をお迎えすることが出来たが、土中から立ちのぼる蒸気と共に白日の下に現れた御遺骨をはじめ、外形しかとどめていない懐中時計、名字が彫られた万年筆、一升瓶、飯盒、水筒、釜、食器、文芸雑誌、手榴弾、弾丸等を見ると、様々な想像をかきたてられる。昭和二十年当時は誰が、どのように使用していたものであるのか。十三柱の方々は生前に互いどのような立場でどのような会話を交わし、どのような状況でそれぞれが身罷られたのであろうか。岩肌にも無数に残る銃弾の跡と「1944」と製造年が記された米国製の水筒等、ここで確かに激戦があつたことを彷彿とさせる。

休日には、硫黄島内を巡った。「硫黄島神社、硫黄が丘、栗林壕、西大佐の記念碑、鎮魂の丘、米軍上陸記念壁画、摺鉢山：」無数に立つ各部隊の壕跡を示す石標とともに、まさに硫黄島は戦跡の島、そして鎮魂と慰霊の島であつた。

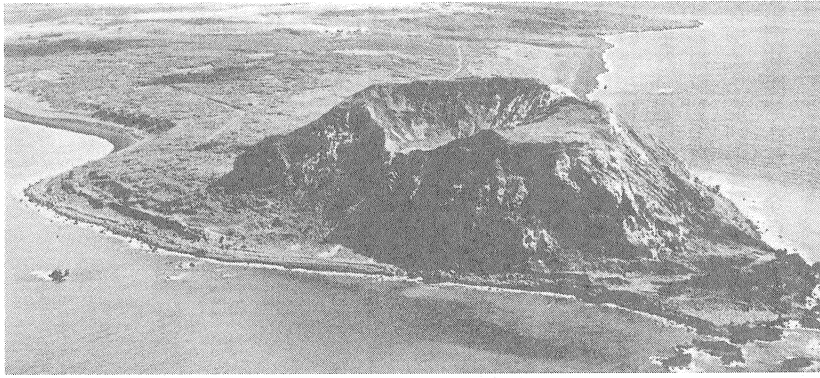
収集された御遺骨は、刷毛で丁寧に土を落として洗骨を行い、箱に納めて白布を掛ける。

飛行場の発着時、そして遺骨の引き渡し式が行われた千鳥ヶ淵戦没者墓苑での奏楽の際にも御遺骨を納めた手箱の箱は、その音に共鳴して震え、あたかも英霊が何かを語ろうとしているかのように感じられた。

御遺骨引き渡し式に参列して、彼の地に思いを寄せ、英霊のみこころを偲べば、  
国の為 重きつとめを 果たし得て  
矢弾尽き果て 散るぞ悲しき  
仇討たて 野辺には朽ちじ 吾は又  
七度生まれて 矛を執らむぞ  
醜草の 島に蔓る その時の  
皇国の行く手 一途に思ふ

(栗林中将辞世の句)  
に窺えるように、国の為、また家族の為に一日でも本土に敵が近づく時期を遅らせるべく、硫黄島において散華されたのであるが、御遺族の心情の中には、  
硫黄噴く島  
た、かひに 果てにし人を  
かへせとぞ 我はよばむとす  
大海にむきて (釋道空)

硫黄島における戦没者概数二万一千九百柱の内、いまだ半数以上は本土に



硫黄島を南から俯瞰・手前は摺鉢山

帰還を果たしていない。今日、祖国の平和と繁栄の為に身を捧げてその礎となられた英霊の御遺骨を、一日も早く総て本土にお迎えできる日が到来することを切に願う。  
(靖國神社報『やすくに』第657号・平成22年4月1日発行より)

図書紹介

ダニエル・H・デイソン著  
『フィリピン少年が見た  
カミカゼ』  
幼い心に刻まれた  
優しい日本人たち

著者のデイソン氏は、昭和49年にルソン島マバラカット東飛行場跡に、神風特攻隊顕彰碑を建立した人物である。戦後、歴史学を学び、米国のフィリピン統治の実態を知り、欧米諸国のアジア侵略が、大東亜戦争によって終止符が打たれたことを知ったが、昭和40年に、偶々双子の兄がマニラ街頭の古本屋で求めた、猪口力平・中島正共著の神風特別攻撃隊(英訳)を読んで、少年時代に目の当たりにした神風特別攻撃隊員のことを思い出し、アジアを解放した大東亜戦争の象徴である特攻隊の顕彰碑の建立を思い立ち、10年近い年月を費やして、碑の建立に漕ぎ着けた。

今までに全く報じられることのなかった、戦場となった市井での色々な事件が、赤裸々に、淡々と、日本軍の善行と共に非行も、米・比ゲリラ軍の行状と対比して記されている。その過程で、日本が米・比とは異なった文化を持っていることを、肌身で感じ取るようになっていく。勝ち戦から悲惨な負け戦に至る間が3章にわたっていて、更に6歳年下のエンリケッタ夫人の思い出にも、1章が割かれている。10年近い顕彰碑建立に至るまでの過程が、氏の考え方と共にここまで詳らかにされたことも貴重な記録である。最後に、日本が戦時中に提唱した、大東亜共栄圏構想は、今こそアジアはアジア人の手で、アジア並びに世界平和に貢献するために、実現されるべきであるとの提言で締め括られている。本書は、一人でも多くの日本人に読まれることが望ましく、会員の皆様にも本書の一読をお薦めする次第であります。(菅原道照記)

第八章「真の友情こそ私の願い」の一部を掲載させて頂いた。「真の友情こそ私の願い」○カミカゼはテロリストなどではないところで、カミカゼとイスラム教のテロトが同じと見られることがよくあります。恐らく、イスラム教のテロリストは日本の方法をまねたのでしよう。日本はそれを最初に用いたのです。しかし、だからといって日本人のことをテロリストとは言えません。カミカゼは決してテロリストなどではありません。多くのジャーナリスト達がテロリストとカミカゼを同じに見ていますが、それは大変な誤りです。確かに、テロリストはカミカゼの方法をまねてはいますが、彼らは最初から民間人を狙っています。敵そのものを殺すのではなく、女性や子供を殺しているのです。それはカミカゼの哲学と完全に相反するものです。私が日本の文化や哲学を学んできた時、テロリストの行為は日本人に受け入れられるものではないことを知りました。特に侍達は、そのようなことを決して認めることはありませんでした。侍達は、武器を持たない敵を殺すこ

本書は、氏が11〜15歳の間、居住していたアンヘレスとその周辺で展開された、比島作戦の様々な事件で、著者自身が体験したことを、少年の目線で記したものである。日・米両軍と比ゲリラについて、その実態を公正に捉えている。

発行所 桜の花出版株式会社  
〒206-0011  
東京都多摩市関戸1-1-10  
TEL 042-371-9715  
定価 1470円(税込み)  
次に、出版社のご了承を得て、本書

とを恥としていました。

ですから、現代の侍であるカミカゼがイスラム教のテロリストと同じであるはずがありません。

私のカミカゼ博物館には、様々なジャーナリストが訪ねてきます。

そして、その多くが「カミカゼなどテロリストではないか」と考えています。

ある通信社の記者は、何とか私にそう言わせようと、あの手この手を使って私を罵にはめようと思いました。

そして、「二十年もすれば、ニューヨークの世界貿易センタービルの跡地にアラブのテロリストの記念碑が建てられるのではないでしょうか」などと私に聞くのです。私はただ「ばかばかしい」としか答えませんでした。

また、違う話になりますが、私はトム・クルーズが主演した『ラスト・サムライ』という映画（編注：二〇〇三年に公開されたハリウッド映画）を見て感動し、文章を書いて新聞に投稿したところ、それが掲載されました。

その内容は、「何故、彼らを『ラスト・サムライ』と言うのか、本当のラスト・サムライは一九九四年にいたのだ。彼らは『カミカゼ』と言い、ここアンヘレスとマバラカットで結成されたのである。私は、誰かが彼らについ

ての『ラスト・トゥルー・サムライ』という映画を作ってくれることを望む」というものでした。

○カミカゼは手段に過ぎない—今こそ大東亜共栄圏の実現を

私は、フィリピン人は欧米の考え方に染まり過ぎてしまっていると思えます。その状況には目に余るものがあります。もっと、アジアにおけるつながりがなければいけません。

フィリピン人は日本人、また中国人、マレーシア人達との関係をもっと作るべきです。

日本が戦争中に提唱していた「大東亜共栄圏」は、現在の平和な時にこそ実現されるべきものなのです。

この考えは戦争中に始まったものですが、戦争中であるが故に、その時に実現できるようなものではありません。実際には日本がその思想の下で行ったのは、アジアの国々からより多くの原材料を日本に持つていくということだからでした。

それは、アジアの共栄ではなく、そのために、フィリピンや他のアジアの国々がそれを実際に受け入れることはありませんでした。ただ、それは戦時下だったからそうなってしまったのでした。

また、アメリカやイギリスなどによ

る破壊工作があったために、実現出来ないものでした。

しかし、今ならそのような破壊工作はありません。ですから、今こそ大東亜共栄圏が作れる時なのです。

戦争が終わったからといって、大東亜共栄圏の建設を止めてしまつてはいけません。そうではなく、その実現が可能な今こそ、その建設を続けていくべきなのです。

私のカミカゼ記念碑建設のための努力は、この大東亜共栄圏の実現にほんの少し貢献しようとするものだと考えています。

私は、大東亜共栄圏実現を、物質的なことについて進める前に心の部分から始めたのです。

というのは、お互いを尊敬し合い、それぞれの歴史と文化を尊重する真の友情こそが、大東亜共栄圏を実現するからです。

人々の中には、日本とフィリピンの間にあつた戦争についてはもう語りたくないという人もいます。しかし、私はカミカゼという戦争の時にあつたことを平和の実現のために利用しているのです。

日本とフィリピンの間には戦争という歴史以外の関係はありませんでした。戦前の関係はほとんどないに等しいも

のでした。

両国の関係を戦争から始めなければならぬのならば、私達は戦争の中に何か崇高で、尊敬に値するものを見出さなければなりません。そして、それはカミカゼの哲学以外にはありません。カミカゼを尊敬する人はフィリピンにも日本にもいます。ですから、そこから始めるべきなのです。

日本においても少し前までは、カミカゼについてかたることも避けられていましたが、現在の日本はカミカゼに対して敬意を払うようになりました。状況は変わりつつあります。

私の目標は大東亜共栄圏であり、またそれは「友情」なのです。戦争ではありません。カミカゼはそのための手段に過ぎません。

私は、友情を培っていくことこそが目的であるということに少しずつ気づいていきました。

この目的こそが、私を休ませることなく活動させてきたものなのでした。

日本とフィリピンが戦争から始まつた関係だったために、そこから始めようとしているだけなのです。

その行き着くところは友情であり、その他の何ものでもありません。

### ガダルカナルからの便り

(絵葉書)

JYMA日本青年遺骨収集団  
ソロモン諸島派遣隊

拝啓 新春の候ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃からJYMA一同を温かく見守っていただき誠にありがとうございます。この度、平成22年3月7日～18日までの12日間、ソロモン諸島ガダルカナルにおいて、遺骨収集を行いました。私は分遣隊の一員として、丸山道の険しいジャングルで活動しました。あ

の様な険しい所を重装備で行軍した先人の苦しみを思うと胸が痛みます。今派遣では、本隊と分遣隊合わせて33柱の御遺骨をお迎えすることができました。これもひとえに皆様のお力添えのおかげだと思っております。

最後になりますが、お体にはお気を付けて、御自愛ください。謹白

平成22年3月18日

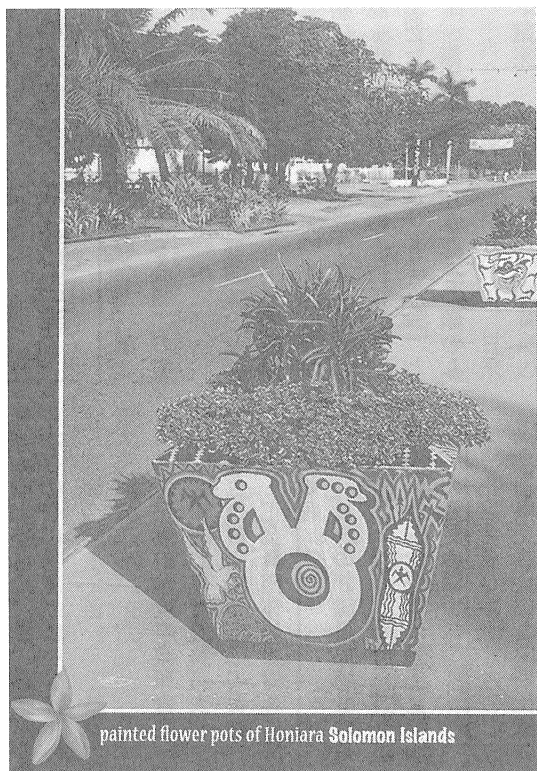
JYMA日本青年遺骨収集団

ソロモン諸島派遣隊

外山 豊

(財)大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会 御中



painted flower pots of Honiara Solomon Islands

### ビスマーク諸島からの便り

(絵葉書)

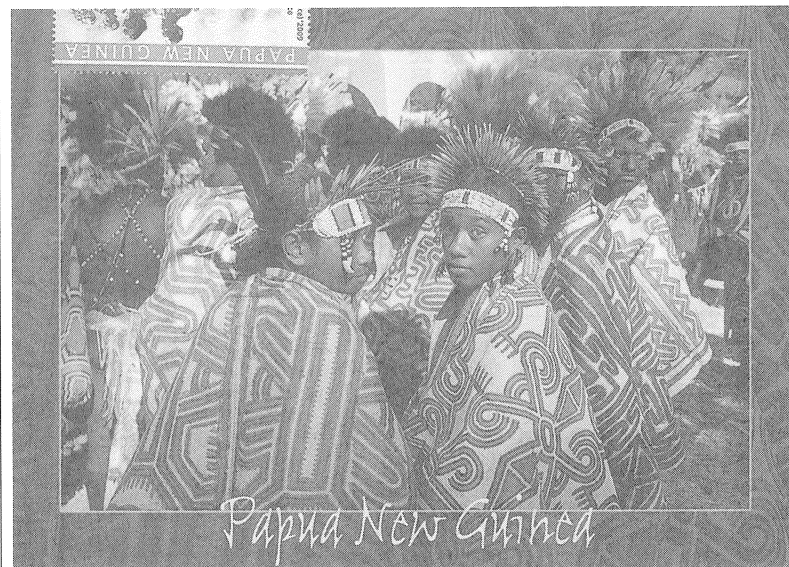
JYMA日本青年遺骨収集団  
ビスマーク諸島派遣隊

拝啓 早春の候ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

日頃からJYMA一同を温かく見守っていただき誠にありがとうございます。

このたび、平成22年3月7日～3月18日までの12日間、ビスマーク諸島タロキナにおいて、遺骨収集を行いました。灼熱の太陽と突然のスクールの中の活動により改めて先人達の思いに心を馳せることが出来ました。

今派遣では、ソファナ島という場所です8柱の御遺骨をお迎えできました。これもひとえに皆様方の温かいお力添えのおかげだと思っております。最後になりますが、お体にはお気を付け、ご自愛下さい。謹白



Papua New Guinea

平成22年3月18日  
JYMA日本青年遺骨収集団  
第267次ビスマーク諸島派遣隊

(財)大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会 御中

田島 輔

# 事務局からの報告等

## 一 平成21年度第4回理事会及び第3回評議員会(書面による会議)の実施

### 1 実施の趣旨及び回答要領

当協議会は、平成22年度事業計画(案)及び予算(案)について、年度開始に先立ち、理事会及び評議員会の承認を得るべく、諸般の事情により、「書面による理事会及び評議員会」として、議案の審議及び承認をお願いした。

### 2 議案

ア 第1号「平成22年度事業計画」

イ 第2号「平成22年度収支予算書」

### 3 回答結果

3月31日までに、理事及び評議員全員から賛同の回答を得、原案どおり承認された。

## 二 平成22年度第1回理事会及び同評議員会の開催

5月13日(木)、千鳥ヶ淵戦没者墓苑・会議室において理事会を、5月25日(金)、偕行社・会議室において評議員会を開催した。

右の各会議は、山本卓真会長出席の下、事務局からの提議について熱心な

討議が交わされた。その結果、事務局案はそれぞれ原案どおり承認された。

### 1 理事会

#### ア 議案

① 平成21年度事業報告

② 平成21年度財務諸表

③ 役員人事・監事の異動

④ 正会員団体等の管理に関する規程(案)

⑤ 最初の評議員候補者の追加推薦

⑥ 新定款策定の骨子及び「定款の変更の案」(案)

#### イ 出席者及び議長

理事全員(12名中委任状2名)及び竹之下和雄監事が出席した。

### 2 評議員会

#### ア 議案

理事会に同じ。

#### イ 出席者及び議長

評議員14名中11名(委任状1名を含む)、ほかに山本卓真会長、竹之下和雄監事、事務局から柚木文夫理事長、若木利博理事が出席した。

#### ウ 議長―野口清秀評議員

## 三 平成22年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭第1回実行委員会の開催

5月21日(金)、偕行社・会議室に

において、支援団体等の実行委員11名の参加を得て、開催した。事務局からの提案に対し、昨年度の反省事項等を含めて熱心に意見交換を行い、意思統一を図った。

## 四 最初の評議員選定委員会の開催

5月27日(木)、偕行社・会議室において、齋須重一副会長出席の下、選定委員5名中4名(1名欠席)及び事務局から2名が参加した。

### 1 主要議題

最初の評議員候補者推薦名簿について

2 「最初の評議員選任のための委員会(第1回)」において審議された事項について、議事録を基に確認し、意思統一をした後、新公益法人移行のための「定款の変更の案」(案)を説明し、議案の審議に入った。活発な意見交換が行われ、特に「定款の変更の案」について細部にわたり質疑が行われた後、議案は承認された。

## 五 慰霊諸団体連絡会議の開催

当協議会は、6月1日(火)千鳥ヶ淵戦没者墓苑・会議室において、平成22年第1回慰霊諸団体連絡会議を開催した。山本卓真会長出席の下、13団体の代表者15名が出席した。

当協議会は、首都圏所在の正会員団体による連絡会議(従来は連絡調整会議と称した)を年2回実施している。

### 1 主要討議事項

ア 平成22年度協議会事業について

イ 平成22年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭について

ウ 慰霊顕彰事業の現状と問題点について

エ 慰霊諸団体の活動状況について

2 参加団体各代表者の多年にわたる活動経験に基づく積極的な意見交換が行われた。本会議において、東京ヤング会及びJYMAから「戦没者慰霊思想の普及啓蒙」についての基調報告があり、その後の討議において、今後の慰霊事業の在り方、特に戦没者慰霊思想の普及啓蒙のための活動の在り方について、広く意見を交換すると共に、海外にある慰霊碑の現況と今後の維持管理、遺骨収集の現況と今後の方向性についても切実な意見が述べられた。

3 会議出席団体

#### (財)海原会

英霊にこたえる会

エラブカ東京都人会

神奈川県偕行会

旧戦友会

埼玉偕行会

全ピルマ会

(財) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会  
東京都郷友会  
東京ヤゴダ会

(財) 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会  
(NPO法人) JYMA  
陸士第五十七期生会

六 協議会参加団体の活動紹介

遺骨収集に活躍する(NPO法人)  
JYMAのメンバーの現地からのレポート紹介(別掲)

七 慰霊祭への参加状況

1 硫黄島日米合同慰霊式

平成22年3月3日(水)、硫黄島の「日米再会記念碑」前において、日米合同慰霊式が挙行され、当協議会から柚木文夫理事長が出席した(別掲)。

2 第13回千鳥ヶ淵慰霊祭(同徳台七期生会)

平成22年3月30日(火) 12時から、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、同徳台七期生会が主催する同慰霊祭に、当協議会から柚木文夫理事長が出席した。

平成22年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のお知らせ

当協議会は、参加諸団体と共に、本年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を、来る7月10日(土) 12時から靖國神社において催行いたします。会員の皆様には、既にご案内が届いていると思いますが、ご質問等は、電話又はFAXでご連絡下さい。(連絡先)

(財) 大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会事務局  
電話 03-5730-0421  
FAX 03-5730-0422

(参考) 参加費用

玉串料 二〇〇〇円  
直会参加料(参加者のみ) 五〇〇〇円

財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会新年度役員等一覧(5月31日現在)

名誉総裁 三笠宮崇仁親王殿下  
会長 山本 卓眞  
副会長 岩下 邦雄  
理事長 柚木 文夫  
理事 秋上 眞一  
小田 邦博  
夏川 和也  
福田 一彌

財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会正会員団体一覧(5月31日現在)

藤田 幸生 若木 利博 旧战友連(会長代行 石橋 聰)  
監事 植田 弘 竹之下和雄 近畿偕行会(会長 野上 五夫)  
評議員 赤木 衛 新井 光雄 熊本偕行会(会長 美作 博)  
新井 剛 池邑 正男 熊本歩兵第二五聯隊战友会(前会長 中山 正孝)  
倉谷三男四郎 栗原 宏 群馬偕行会(会長 新津 保義)  
富田 定幸 奈良 保男 興亜観音を守る会  
野口 清秀 藤原 博  
松島トモ子 森田 次夫 埼玉県偕行会(会長 小山内昭三)  
板垣 正 大久保 隆 佐賀県偕行会(会長 江口 浩)  
下山 敏郎 新庄 鷹義 (NPO法人) JYMA  
羽佐間重彰 堀江 正夫 (理事長 赤木 衛)  
相談役 (財) 偕行社副会長  
(財) 水交會会長  
つばさ會会長  
参与 寺島 芳彦 横溝 潔  
全国近歩一会(会長 糟谷 勝美)  
全国甲飛會  
全ビルマ會(会長 菅野 廉一)  
(財) 太平洋戦争戦没者慰霊協會(理事長 秋上 眞一)  
筑後地区偕行会(会長 鈴木 英樹)  
(財) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会(会長 宮下 創平)  
東京都郷友会(会長 矢部 廣武)  
抑留战友会・東京ヤゴダ会(会長 未定)  
特攻殉国の碑保存会(事務局長 西村 金造)  
(財) 特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

(あいうえお順)

(あいうえお順)

英霊にこたえる会

エラプカ東京都人会

齋須 重一  
鹿兒島偕行会(会長 富樫 利男)  
神奈川県偕行会(会長 荒井 和彦)

暑中お見舞い

申し上げます

財団法人

大東亜戦争全戦没者  
慰霊団体協議会

名誉総裁 三笠宮崇仁親王殿下  
会長 山本卓真  
副会長 岩下邦雄  
同 斎須重一  
理事長 柚木文夫

財団法人 借 行 社

会長 山本卓真  
副会長 斎須重一  
同 塩田章  
同 志摩篤  
理事長 福田一彌  
事務局長 菊地勝夫

(会長) 山本卓真  
豊橋歩兵第十八聯隊戦友会

(代表) 伊奈作一郎  
姫路借行会 (会長) 小林繁

福井県借行会 (会長) 浅野一行

宮崎県借行会 (会長) 川野周平

山口県借行会 (会長) 坂本強

財団法人 水 交 会

会長 林崎千明  
理事長 夏川和也  
副理事長 巖岩壮吉  
専務理事 藤田幸生  
事務局長 池邑正男

航空自衛隊退職者団体

つばさ会  
会長 村木鴻二  
副会長 竹河内捷次  
同 杉山弘  
同 横幕功  
同 山本修三

予科練雄飛会 (会長) 堺周二  
陸士第五十七期同期生会

(代表) 大中福太郎

新入会員 (敬称略)

(3月1日～5月31日)

【正会員】

熊本借行会

浦山 山長人 山口 浄秀

【賛助会員】 (あいうえお順)

会報「慰霊」第17号正誤表

次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。

(訂正箇所)

14頁 2段目後ろから9行目

誤「杉山藩相談役」

正「杉山蕃相談役」

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会におきましては、慰霊事業の永続を図るため、多くの方々  
の会員ご加入をお待ちしております。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別ご芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する法人・団体)

年会費 五〇〇〇〇円